

五稜会病院における多職種連携と業務分担の最適化

五稜会病院は外来・入院ともに患者数が多く、高い診療機能を維持している。しかし、その裏側では医師の負担が増大しており、従来の業務体制には限界がある。今後は、コメディカルとの協働を前提とした業務分担を再構築し、チーム医療として持続可能な体制へ転換していく必要がある。



目的

多職種連携と業務分担の最適化を図ることで、医師の過重負担を軽減し、コメディカルの専門性を最大限に活用したチーム医療を推進する。これにより、診療の質と安全性を維持・向上させつつ、持続可能な医療提供体制の構築を目的とする。

■ 役割分担の基本原則

- 医師にしか担えない業務は医師が責任を持って実施し、それ以外の業務はコメディカルと多職種で分担することで、診療の質と効率の両立を図る。



■ 医師しか出来ない仕事

←「責任を伴う最終判断は医師」

- 🏥 外来診療・入院診療における診断と治療方針の決定
- 💊 処方・薬物療法の最終判断
- 🧠 m-ECTの実施および適応判断
- 🔒 隔離・身体的拘束の医学的判断



■ 多職種で担う業務

←「プロセスはチームで支える」

- 👤 予診聴取・病歴整理 (心理士・MHSW・研修医)
- 👤 カウンセリング・心理社会的支援 (看護師・心理士)
- 👤 服薬支援・生活支援 (看護師・MHSW)
- 👤 情報共有・カンファレンス運営 (多職種)



■ 事例① 外来予診聴取の分担



- 新患外来では、これまでの病歴や生活背景の整理に多くの時間を要する。これを医師がすべて担うと、診療の効率は大きく低下する。
- 五稜会病院では、心理士、研修医、MHSWが予診を担当し、病歴や主訴、生活背景をあらかじめ整理している。その情報をもとに診察医が診療を行うことで、スムーズな外来の流れが確保されている。

👉 医師は診断・意思決定に集中し、多職種が情報整理を担うこの分担により、効率と質の両立が実現されている。

■ 事例② 看護カウンセリングの活用

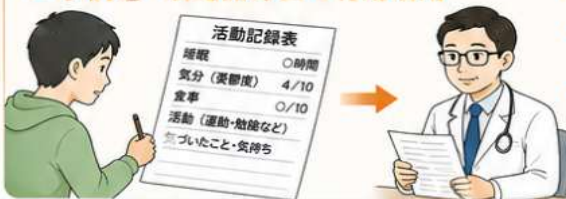


- 患者は家庭問題、仕事、対人関係など多様な悩みを抱えて受診する。
- しかし、外来診療において医師が十分な時間をかけて対応することには限界がある。そこで、当院では認定看護師によるカウンセリングを活用し、患者の心理社会的問題に対する支援を行っている。特に思春期症例では、必ずしも薬物療法を要しないケースも多く、看護師による継続的なカウンセリングが有用である。

👉 医師は診断・治療方針に集中し、看護師は患者の悩みを丁寧に受け止めるこの役割分担により、質の高い診療が実現される。



■ 事例③ 活動記録表の有効活用



- ストレスケア・思春期病棟では、活動記録表を活用している。
- 患者は日々の生活状況や気分(憂鬱度など)を記録し、診察時に用紙を持参する。
- 医師はその記録をもとに診察を行うことで、入院生活の状況や精神状態の変化を短時間で把握でき、効率的な診療が可能となる。また、患者自身にとっても記録を振り返ることで自己理解が深まり、治療への主体的な参加につながっている。

👉 患者の記録が診療を支え、効率と理解の両立を実現する。



多職種の専門性をつなぎ、業務を分担することで、医療の質と安全性を高め、持続可能なチーム医療を実現します。

